

## 高大の教育接続と初年次教育 —初年次教育の多様性と標準性の相克—

川嶋太津夫<sup>1</sup>

大阪大学

### Educational Articulation between High School and Undergraduate Program and First-Year Experience: Conflict between the Diversity and the Commonality of the First-Year Experience

Tatsuo KAWASHIMA

Osaka University

学会としては世界で初めてと言われる初年次教育学会が我が国に誕生したのは2009年のことであった。学会発足を大きく後押ししたのが、2008年12月に中央教育審議会が公表した「学士課程教育の構築に向けて」と題する答申であった。同答申は、1991年の大学設置基準の改正、いわゆる「大綱化」以降、大学設置・改組の規制緩和が進展し、大学・学部数の増加に伴う大学教育の多様化が行き過ぎていることに警鐘を鳴らし、我が国の学士学位の国際的通用性や社会からの信頼を得るためには一定の質保証の枠組みが国レベルで必要だとして、専攻分野を超えた学士共通の学習成果を、参考指針ながら「学士力」として提案した。同時に、同答申は大学進学率が5割を超え、進学者の進学意識や学力の多様化が進んでいるため、大学の多様化と相まって、高校教育と大学教育の接続が極めて困難な状況にあるとの認識のもと、現在中央教育審議会高大接続特別部会での審議につながる高大接続の問題提起も行った。この高大接続に関しては、入試制度改革、特に推薦入試・AO入試の改革に加えて、公的文書中初めて「初年次教育」が取り上げられ、初年次教育は一気に関係者の脚光を浴びることになった。しかし、この間、さらに大学、大学生の多様化が一層進行し、同じく初年次教育も多様化しているのではないか。もちろん、各大学とそれぞれの受け入れ学生の状況に応じて有効なプログラムは異なることは当然であるにしても、学会としてはこれまでの各大学における実践や研究の成果を総括し、なんらかの「優良事例 Good Practices」を取りまとめるなど、多様な取組の中からある程度各大学に共通して有効な初年次プログラムを提案する段階に来ているのではないか。そこで本稿では、まず、高校教育と大学教育の多様化の現状、その結果、生起する高大接続の問題状況および初年次教育の多様化の状況について触れ、最後に今後本学会として取り組むべき課題に触れることにしたい。

[キーワード：初年次教育，高等学校教育，高大接続，多様性，標準]

<sup>1</sup> 大阪大学 tatsuo314@iai.osaka-u.ac.jp

## 1. はじめに

学会としては世界で初めてと言われる初年次教育学会が我が国に誕生したのは2009年のことであった。学会発足を大きく後押ししたのが、2008年12月に中央教育審議会が公表した「学士課程教育の構築に向けて」と題する答申であった(中央教育審議会, 2008)。同答申は、1991年の大学設置基準の改正、いわゆる「大綱化」以降、大学設置・改組の規制緩和が進展し、大学・学部数の増加に伴う大学教育の多様化が行き過ぎていることに警鐘を鳴らし、我が国の学士学位の国際的通用性や社会からの信頼を得るためには一定の質保証の枠組みが国レベルで必要だとして、専攻分野を超えた学士共通の学習成果を、参考指針ながら「学士力」として提案した。同時に、同答申は大学進学率が5割を超え、進学者の進学意識や学力の多様化が進んでいるため、大学の多様化と相まって、高校教育と大学教育の接続が極めて困難な状況にあるとの認識のもと、現在中央教育審議会高大接続特別部会での審議につながる高大接続の問題提起も行った。この高大接続に関しては、入試制度の改革、特に推薦入試・AO入試の改革に加えて、公的文書中初めて「初年次教育」が取り上げられ、初年次教育は一気に関係者の脚光を浴びることになった。答申は、初年次教育を次のように定義している。

高校教育や他大学からの円滑な移行を図り、学習および人格的な成長に向け、大学での学問的・社会的な諸経験を成功させるべく、主に新入生を対象に総合的につくられた教育プログラム。(同答申 35 p.)

しかし、この間、さらに大学、大学生の多様化が一層進行し、同じく初年次教育も多様化しているのではないか。もちろん、各大学とそれぞれの受け入れ学生の状況に応じて有効なプログラムは異なることは当然であるにしても、学会としてはこれまでの各大学における実践や研究の成果を総括し、なんらかの「優良事例 Good Practices」を取りまとめるなど、多様な取組の中からある程度各大学に共通して有効な初年次プログラムを提案する段階に来ているのではないか。

そこで本稿では、まず、高校教育と大学教育の多様化の現状、その結果、生起する高大接続の問題状況および初年次教育の多様化の状況について触れ、最後に今後本学会として取り組むべき課題に触れることにしたい。

## 2. 身近で当たり前になった大学進学

文部科学省が毎年行う学校基本調査の2014年度版によれば、2014年4月に大学・短大への高校からの進学率は2010年の54.3%には及ばないものの、前年度から0.7ポイント増加し、2011年度と並んで2番目の高い進学率となった(図1)。また、大学(学部)だけの進学率を見ると(過年度を含む)、前年度から1.6ポイント上昇して51.5%となり、これは過去最高の水準となった。

他方、高等学校への進学率は2014年4月に98.7%であり、すでに事実上「普遍(義務教育)化」している(図2)。つまり、今や、日本の若者の二人に一人が大学に進学している状態が恒常化している。ちなみに、小学校1年生における幼稚園修了者の比率は54.2%であり、就学率がほぼ100%の小学校、中学校、高等学校は別にしても、大学進学は幼稚園

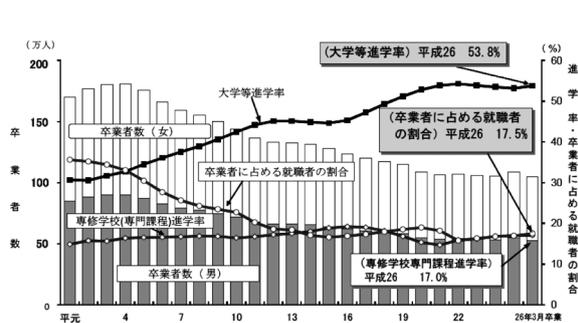


図1 高校卒業者の進路

出所：文部科学省「平成26年度学校基本調査」

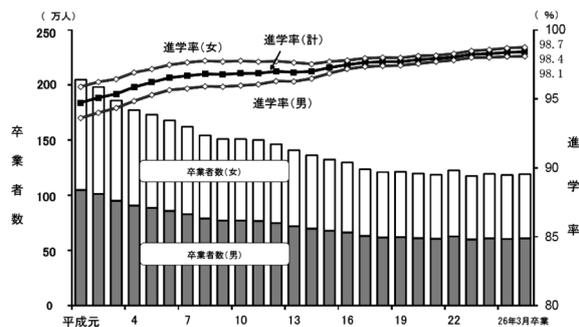


図2 高等学校進学率

出所：文部科学省「平成26年度学校基本調査」

就園と同じく、もはや特別な選択肢ではなくなりつつある。

さらに、図1、図2を見れば一目瞭然のように、我が国の若者人口は急激に減少している。にもかかわらず、大学数はこの10年間で709大学から781大学へと増加している。特に、私立大学の増加が顕著であり、短大からの転換も含めて542大学から603大学へと160校も増加している。

### 3.「問題化」する高大接続教育

大学進学が、日本の若者にとって、極めて自然で、当然の選択肢となったことは、歓迎すべきことではあるかもしれないが、教育上の接続の観点からは、残念ながら高校教育と大学教育の関係を「問題化 Problematic」させることとなった。言い換えれば、大学進学の「自明化」は、接続上の「問題化」をもたらしたのである。それは、高等学校教育の「多様化」と大学教育の「多様化」が相まって引き起こされた接続上の問題状況である。

まず、高等学校側の多様化を、(1)生徒の多様化、(2)高等学校の多様化、(3)高等学校における学びの多様化、の3点から考察してみよう。

#### (1) 生徒の多様化

先にも紹介したように、中学校から高等学校への進学率は99%で、中学校卒業者のほぼ全員が高等学校に進学している状況である。高等学校への入学者選抜の原則が、当時の文部省初等中等教育局長が1963年に発出した「公立高等学校入学者選抜要項」で「高等学校の教育課程を履修できる見込みのない者をも入学させるのは適当ではない」「高等学校教育を受けるに足る資質と能力を判定して行うものとする」という「一般適格主義」から、進学率が94%まで至った1984年にその方針を改め「高等学校の入学者選抜は、各高等学校、学科等の特色に配慮しつつ、その教育を受けるに足る能力・適性等を判断」して良いとする「個別適格主義」へと転換されて以降、学力面は言うに及ばず、意欲、関心、態度などにおいて極めて多様な中学生が高等学校に進学するようになってきた。

#### (2) 高等学校の多様化

ほぼ100%の進学率と、それが引き起こす高校生の多様化に呼応して、それぞれの生徒の興味・関心や学力に対応するために従来の普通科と商業、工業、農業、家庭科などの職業高校(専門学科)に加えて英語、理数、外国語、情報、福祉、総合学科など新たな学科が設置されるようになった。また、全日制、定時制に加えて通信制、単位制高校や中高一

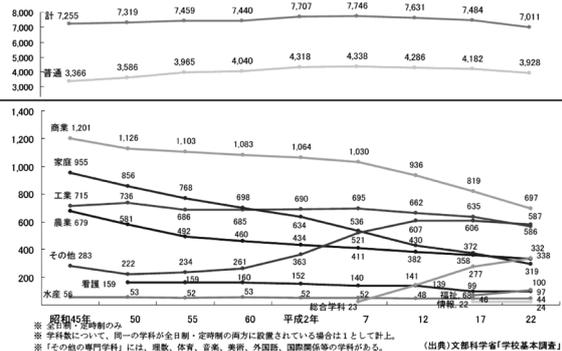


図3 学科数の推移

出所：中央教育審議会初等中等教育分科会  
高等学校教育部会第1回配布資料

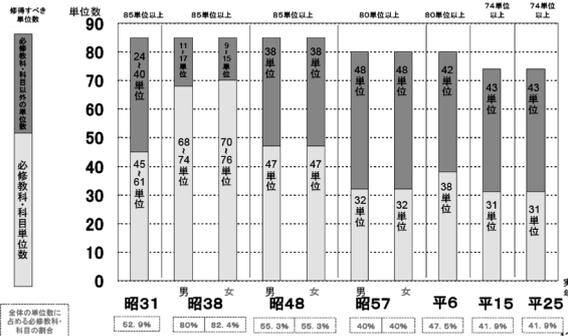


図4 高等学校(普通科)の卒業に必要な単位数の推移

出所：中央教育審議会初等中等教育分科会  
高等学校教育部会第2回配布資料

貫の中等教育学校など、高等学校も多様化した(図3)。

### (3) 学びの多様化

生徒の多様化、高等学校の多様化とともに、一人一人の生徒の興味・関心や学力に対応するために高等学校の教育課程も多様化している(図4)。

たとえば、1963年の学習指導要領では全ての高校生が履修すべきとされた必修教科・科目の卒業単位数に占める割合は80%を超えていたが、現行の学習指導要領ではその比率は41%までに低下している。そのため、高等学校卒業生といっても、何を学んだか(あるいは、何を学ばなかったか)は、一人一人大きく異なっており、入学試験で一律の選抜方法や出題教科・科目を課すことは極めて困難になっている。

同時に、先にも指摘したように、1991年の大学設置基準の大綱化と政府全体の規制緩和の流れの中で、大学数が増加し、提供される教育課程も多様化している。1992年には4年制大学は523大学であったが、2014年には781大学へと20年余りの間に1.5倍増加した。当然、各大学が提供する教育プログラムも多様化し、1991年までは学位ではなく称号であったが学士の種類は28であった。しかし、大学評価・学位授与機構の調査によれば2009年には学士の分野は約700種まで増えている。

昭和30年代から40年代前半までは、大学進学者は進学先の分野にかかわらず高等学校で幅広く学習してきた。同時に、多くの大学には新生を責任をもって引き受け、幅広い一般教養教育を提供する教養部があり、「パン教」と呼ばれ、その教育のあり方には「高校教育の繰り返し」と批判されてはきたが、高等学校の教育内容に精通した教養部教員が存在し、高等学校と大学との教育接続を可能とする仕組みが存在していた。

しかし、1991年の大綱化により、多くの大学で教養部が廃止され、代わりに4(6)年一貫教育が導入され、入学当初から極めて多様な各学部・学科(専攻分野)に新生は所属することになった。

さらに18歳人口の急減と大学数の増加に伴い、ほぼ「大学全入時代」と呼ばれる今日、それぞれの専攻分野での学習の基礎となる教科・科目を入学試験で全て課すことは、学生確保という経営上の観点からは多くの私立大学では現実には困難であり、厳格な学力確認を課さない、本来の趣旨とは異なる推薦入試とAO入試での入学者が、文部科学省の調査では、今や5割近くを占めるようになった。

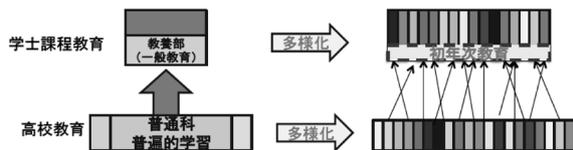


図5 普遍的な学習接続から複雑で限定的な学習接続へ  
出所：著者作成

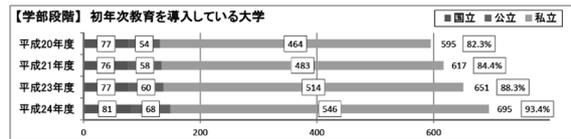


図5 初年次教育を実施している大学数の推移  
出所：文部科学省「大学における教育内容等の改革状況について」2012年度版

このように、かつてのように、大学での学習の基礎となる教科・科目を高等学校で履修していることを前提とした大学教育の構築は極めて困難になっている。たとえば、医療系学部・学科に進学したにもかかわらず、高等学校で生物を履修していなかったり、工学部に入学したにもかかわらず、物理を履修していなかったりということは、もはや珍しいことではなくなった。このようにして、高等学校と大学との教育接続の困難さが著しく顕在化しているのが今日の状況である(図5)。

#### 4. 初年次教育再考

高校教育と大学教育が、それぞれへの進学者が増加し、多様化する状況のもと、2008年の中教審答申「学士課程教育の構築に向けて」は、大学教育(学士課程教育)が多様化しすぎたのではという認識のもと、我が国の学士課程教育が共通に保証する学習成果として「学士力」を提言した。同時に、多様化の結果問題化した高校教育と大学教育の接続問題への対応として「初年次教育」の重要性と「高大接続テスト(仮称)」の開発の必要性を指摘した。

そのため、2008年では、何らかの初年次教育を提供している大学は全大学の82.3%にあたる595大学だったが、2012年には93.4%の695大学にまで拡大した(図5)。

しかし、高校教育、そして大学教育の量的拡大とともに、それぞれが多様化したように、初年次教育の拡大・普及は、同じく初年次教育の「多様化」をもたらした(図6)。

文部科学省の最新の調査によれば、初年次教育として提供されている内容を見てみると、8割以上の大学が採用している「論文の書き方」から3割程度しか提供していない「自校教育」まで、その内容は多様である。

さらに、キャリア・ガイダンスの義務化によって、初年次教育とキャリア教育の境界も曖昧になりつつある。2011年度では、ほぼ全ての大学である95%の大学がキャリア教育を実施している。その内容には、「コミュニケーション能力、課題発見・解決能力、論理的思考力等の育成」を目的とした授業科目が500以上の大学で提供されている(図7)。

他方、初年次教育のプログラムとして、「将来の職業生活や進路選択に対する動機付け・方向付けのためのプログラム」も500以上の大学が提供している。初年次教育も多様化している一方で、キャリア教育との境界も曖昧になりつつある。同じことは、「リメディアル教育(補完教育)」との関係についても指摘されてきた。

さらに、各大学の努力により多様な初年次教育が提供されてはいるが、それぞれのプログラムの有効性については、本学会が得意とする個別事例での報告はあるものの、複数の研究から一般的な法則を抽出するような、たとえば、メタ分析などは全くなされていない。

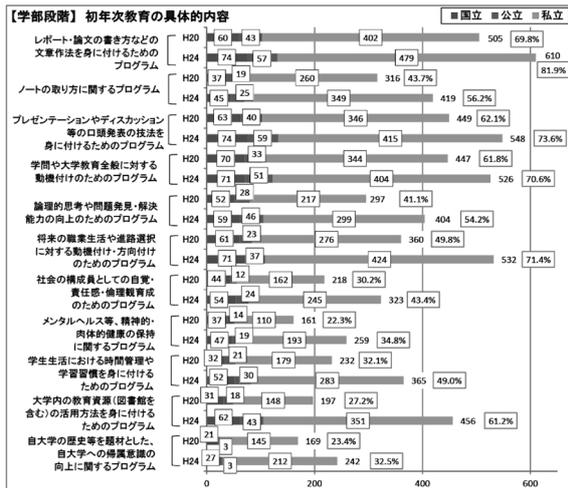


図6 初年次教育の内容

出所：文部科学省「大学における教育内容等の改革状況について」2012年度版

もちろん、冒頭にも述べたように、全ての大学に有効な「万能薬」は存在しないことは当然としても、多様な取り組みの中から、ある程度の普遍的な有効性を有する初年次教育のプログラムを、学会として追求し、提案すべき時期に来ているのではないか。

そこで、「高等学校から大学への円滑な移行を図り、学習及び人格的な成長に向け、大学での学問的・社会的な諸経験を成功させるべく主に新入生を対象に総合的に作られた教育プログラム」（「学士課程教育の構築に向けて」p. 35）という原点に立脚しつつ、また、各大学の多様性を認めつつ、改めて初年次教育の「共通性」や「標準性」の是非について再検討することが必要ではないか。またそうすることによって、隣接プログラムと差別化が可能となり、初年次教育学会のアイデンティも改めて明確になるとと思われる。

### 参考文献

中央教育審議会（2008）「学士課程教育の構築に向けて（答申）」

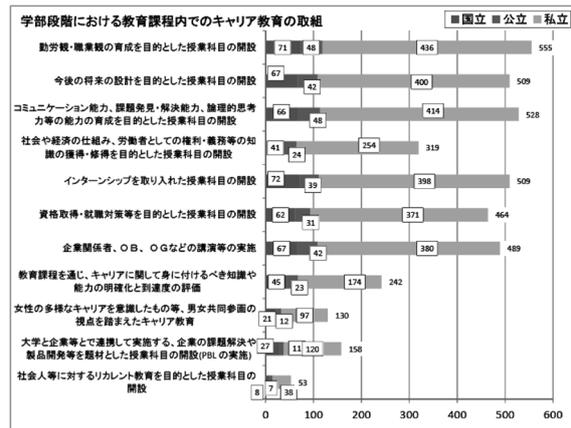


図7 キャリア教育の内容

出所：文部科学省「大学における教育内容等の改革状況について」2011年度版

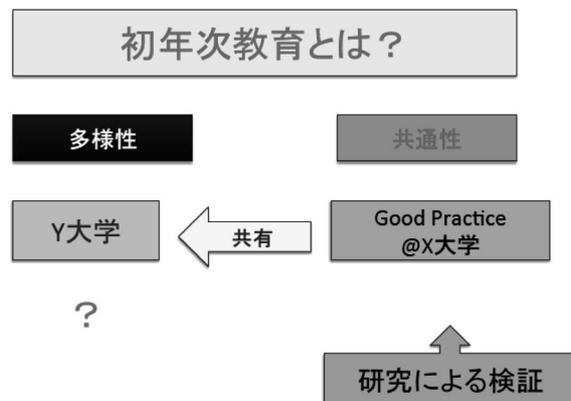


図8 初年次教育学会の課題

出所：筆者作成